

目次

P1 巻頭言「子育てで一番大切なこと」	P4-5 「マリの家庭料理」
P2 「ディプロマツツ・レクチャー」	P6-9 「オランダと日本の深い歴史を探る～ オランダ文化 出島から日本へ」
P3 三田高校の募金活動	
P4 年次総会終了	P10 事務局便り

子育てで一番大切なこと

港ユネスコ協会理事 坪谷ニューエル郁子



社会は、狩猟社会から農耕社会、工業社会、そしてコンピューター社会で迎えた情報社会の21世紀も今や知識経済社会へと変容している。

この多様化する社会で生き抜く為に必要なスキルは、1. 問題解決能力、2. 自立的に学習する能力、3. 情報通信テクノロジーを扱う能力、4. グローバルな認識と社会市民としての意識、5. 金融、経済に対する教育、6. 数学、科学、工学、芸術分野への理解、7. 創造性と私は考える。

これらのスキルを身につけ、全人教育、すなわち価値観の異なる他と共生し、社会に貢献し、自らも幸せに生き抜くことができる人材を育成する教育、21世紀型教育の創造、提供、運営を始めてから早いもので27年が過ぎた。今では、インターナショナルスクールでの60カ国の児童への教育のみならず、日本の教育機関との共同による教育の提供等と、子供達、教育に関わるという天職に恵まれて、こんな幸せなことはないとつくづく思っている。

こうして社会は変容しているが、どの時代においても変えてはいけないことがある。それは、家庭教育である。社会の一番小さい単位は動物としての個、そして次は家庭であり、そこでの教育が個を人として成長させていく。つまり子供達にとっては、日常の生活そのものが家庭教育とも言える。

子供達に限らず、私達誰にとっても社会の土台は家庭にある。そして家庭教育の柱は、もちろん日常と一緒に暮らす保護者にある。しかし近年は、その保護者が家庭よりも小さい単位である動物としての個の精神的な未熟さや多忙さから利己的になり、まず自分の都合や自分にとってのその場限りの楽しみを優先することを、「自立」や「まずは自分の幸せを考えよう」と正しいことのように解釈する価値観が台頭しているような気がする。その結果、家庭教育、しいていえば家庭の存在そのものが崩壊し始めていると感じているのは私だけであろうか？

家族は互いを気遣い、感謝し合い、思いやって生活することが、教育の基本なのではないか。親を尊敬し、大事にする。夫婦は互いを信頼し合い、愛し合い、かすがいの子に精一杯の愛情を注いで夫婦共に育てる。兄弟は互いに助け合う。どんなに時代が変わろうと、私はこの価値観は、不変だと信じている。私達は、誰一人、一人では生きて行けない。全ての事象は互いに支え合って生きているのである。根っこの部分は全て繋がっているのである。

NPO インターナショナルセカンダリースクール理事長
東京インターナショナルスクール代表
日本国際教育センター代表取締役

第 29 回ディプロマツツ・レクチャー

日時：2012年3月6日(火) 午後3時00分～4時30分
会場：国際文化会館 樺山ホール

テーマ：今日の日本の外交政策
“Japan’s Current Foreign Policy”

講師：山口 壯（やまぐち つよし）氏 外務副大臣

Dr. Yamaguchi Tsuyoshi
Parliamentary Senior Vice-Minister for Foreign Affairs



ディプロマツツ・レクチャーは年1回、在日各国大使館および大使館員を対象に、日本をより深くご理解いただくことを目的として、英語で講演をしていただくという、港ユネスコ協会創設以来継続している大きな事業である。

第29回になる今回のディプロマツツ・レクチャーは、講師として山口壯氏（外務副大臣）をお招きして開催し、45カ国、50名の外交官にご参加をいただいた。

最初に高井会長から歓迎の挨拶があり、続いて、司会のアッカーマン副会長が山口副大臣の経歴などをご紹介した。その折、国際文化会館の図書館に、山口壯氏のジョンス・ホプキンス大学に提出された英文の博士論文が収蔵されている本が所蔵されていることが披露された。

山口副大臣はたいへん流暢な英語でにこやかに、ユーモアを交えながら、明解な講演をして下さった。

まず、山口副大臣は、日本が13カ国と締結している経済協力協定（EPA/FTA）について触れ、次いで、主要貿易相手国の紹介、環太平洋貿易協定（TPP）について説明された。

さらに、現在ひそかに温めておられる北東アジアに関する構想を打ち明けられた。出席者はこの構想に強く興味を引かれた様子であった。

質疑応答に移ると、7人もの大使及び外交官から質問が寄せられ、その内容は外交官の果たすべき役割から世界の経済バランス、経済統合の可能性、さらに領土問題まで多岐に亘った。山口副大臣はまた、気さくに、1つ1つ丁寧にお答え下さった。



山口副大臣を囲んでスタッフ一同

最後に、山口副大臣が故吉田茂首相を尊敬されているということを知った。これを伺っていた松本洋副会長から、当日の講演のお礼として、「故吉田茂首相所縁の文鎮」がプレゼントされ、和やかな雰囲気うちに閉会した。

（学術文化委員会担当常任理事 宮下ゆかり）

ユネスコスクール 都立三田高等学校(港区) の奉仕体験活動

ユネスコ街頭募金活動 (寄稿)

三田高校はユネスコスクールとして長く生徒がユネスコの活動を行ってきました。30年以上もの間、文化祭ではユネスコバザーを行い、その売上金をユネスコ協会にお送りしています。

昨年度は新しい試みとして、1年生が街頭募金を行いました。東日本大震災の直後だった頃で、募金は当初予想もしないほどたくさん集まりました。今年度の1年生も4月の奉仕体験活動の日にお台場で街頭募金を行うことになりました。



三田高校はユネスコスクールですが、生徒や保護者の中にはそのことを知らない、または意識していない人も多かったことが最近のアンケートでわかりました。

文化祭で行っているバザーも、ユネスコに協力するバザーであるということがあまり周知されていませんでした。都立高校として唯一のユネスコスクールとしての伝統が、いつの間にか薄れようとしていたのです。



そこで、生徒が組織するユネスコ委員会では、まず文化祭のバザーにおいて、大きな垂れ幕を作りました。また、バザー会場に募金箱を設置し、バザーの売り上げがユネスコに寄付されることと、三田高校がユネスコスクールであるということをアピールしました。

二つ目の取り組みが、今回の1年生による街頭募金です。入学したての生徒全員に「三田高校はユネスコスクールである、生徒は全員、ユネスコの一人なんだ」という意識を持ってもらうことにしました。

昨年度は東日本大震災への復興支援ということで募金を行いました。今年度はあえて募金の使い道を明確にせず、「ユネスコ協会への募金」ということにしました。生徒は、募金活動をする前に、ユネスコがどのような活動をする団体なのかを知る必要がありました。街頭に立つためには、ユネスコの活動をアピールしなければ募金活動ができません。実際に自分たちが路上で人々に声をかけるためには、その活動内容を自分のこととして咀嚼する必要がありました。学校ではユネスコの活動を紹介するプリントを配り、生徒自身がユネスコの活動に興味を持ち、考えるきっかけとなればと期待しました。

さて、実際に街頭に立った生徒たちはどうだったでしょう。ほとんどの生徒がユネスコの大きな活動「寺子屋運動」「世界遺産」「日本文化の保護」などについてアピールしながら募金活動を行うことが出来ました。「世界には字の読み書きが出来ない人がたくさんいます。どうかご協力下さい。」などの言葉を自分で考え、人々に呼びかけていました。これで、今年度の1年生は全員が三田高校がユネスコスクールであることと、ユネスコ協会がどのような活動をしているかを、自分のこととして実感できるようになったようです。



3時間半の募金活動で、138,885円が集められました。この募金額は港ユネスコ協会から、フィリピンミンダナオ島にあるミンダナオ子ども図書館に寄付されることになりました。生徒たちが一番気にかけていた発展途上国における教育支援に使って頂けるとのこと、一同大変喜んでおります。

生徒たちの中には、「またやりたい」「もっと長くやりたかった」などの感想もあり、ひとりひとりの心に残る充実した活動になりました。三田高校に入学してくる生徒には国際協力に興味のある生徒が多く、この活動をきっかけに更に国際協力とユネスコ活動に興味を持ち、将来につなげていってくれればと願っています。

今回の募金活動におきましては、港ユネスコ協会の皆様に募金箱の提供等ご協力いただきました。心よりお礼申し上げます。

(この文章は、1学年担当秋山英恵先生からいただきました。港ユネスコ協会は、お預かりした募金を、三田高校のお名前で、ミンダナオ子ども図書館ならびに、東日本大震災ユネスコ協会就学支援金として日本ユネスコ協会連盟へ、寄付させていただきました。有難うございました。)

2012 年度年次総会無事終了

日時:2012 年 4 月 24 日(火) 18:00~19:00 会場:港区立生涯学習センター305 号室

会場入口で、総会資料とともに、刷り上ったばかりの「港ユネスコ協会創立 30 周年記念誌」が配布されました(右の写真)。表紙の絵は三輪公忠名誉会長の「おもかげ」です。

101 頁にわたる内容は、昨秋に行われた 3 つの 30 周年記念事業の報告、各委員会紹介、2006-2011 年度の活動記録、30 年間の事業別記録などが含まれています。

総会は、中川副会長の進行によって進められました。まず高井会長から、昨 2011 年度は創立 30 周年の記念すべき年でありましたが、3 つの記念事業がすべて成功裡に終了したことの喜びと感謝を表明する挨拶がありました。

武井港区長がご多忙のなかご列席下さり、当協会の 30 年にわたる活発な活動に対するあたたかいお祝いとお礼のご挨拶をして下さいました。また、「港区には、外国籍の住民が約 1 割おられ、大使館も年々増える傾向にあり、国際都市としての役割がますます大切になっています。港ユネスコ協会の役割にますます期待しています。」という励ましのお言葉をいただきました。

すべての議案が承認されました。高井光子会長が再任され、副会長には中川統夫さん、松本洋さん、棚橋征一さん、ウィリアム・アカーマンさんの 4 名が再任され、今村孝子さんが新たに就任されました。新たに、理事には清水軍治(前副会長)さん、永野博さん、山田撰子さん、常任理事には奥村和子さんが就任されました。また、学術文化委員会と国際理解講座委員会が合併して一つの「国際・学術・文化委員会」となりました。学生会員と外国籍の会員の年会費は、両会員の増加を願って 1000 円に改正されました。出席者は 33 名でした。

会員の皆さま、新たな時代に向けて、心と力をあわせて、前進いたしましょう。



西アフリカ・マリの家庭料理

講師 青木 ラフマトウさん (西アフリカ料理教室主宰)

日時:2012 年 3 月 17 日(土) 12:00~15:30 会場:港区立男女平等参画センター(リ-ブ)料理室



講師の青木ラフマトウさんは、西アフリカ・マリ共和国北部トンブクトゥ州のご出身でサハラ砂漠の遊牧民として知られるトゥアレグ人です。

隣国のセネガルでボランティアとして活動中、JICA からセネガルに派遣中の日本人男性と巡りあって、結婚されて 18 年。ご主人と一緒にアフリカなど数か国に滞在された後、今は東京で、高校生と中学生の 2 児のお母さんとして、堪能な日本語を駆使しながら、すっかり日本の生活に溶けこんでおられます。子育ての傍ら、アフリカの料理や魅力を広めることに努めておられます。

マリ共和国はアフリカの西に位置し、国土の 1/3 はサハラ砂漠が広がり、中央にはニジェール川が流れています。多民族国家で、公用語はフランス語ですが部族ごとの言語も使われているようです。

マリ共和国が誇るものが 3 つあります。

まず 1 つ目は食文化が優れていること。穀物は米、麦、ヒエなど日々の食事に合わせて食べますし、主食は肉、魚ともに豊富とのこと。魚はニジェール川で獲れる川魚が美味しいそうです。

そして 2 つ目は音楽が有名なことです。音楽は国民の生活の一部で、聴くこと、踊ることは生きていく上で欠かせないとのことでした。

3つ目はフェスティバルが有名なことです。サハラ砂漠のラクダレースは世界中から見物客がくるそうです。男の子はサッカーが好き、女の子はお洒落が好きだという明るいお国柄です。

今回教えていただいたお料理は以下の4品です。

◆ティゲデゲ TIGADEGE (ピーナッツバター風味のシチュー)

羊肉(ラム)と野菜をトマトソースとピーナッツバターで煮込み、最後にオクラを入れてとろみをつけたシチューです。スキミダラでだしをとり、新しくもあり懐かしさもある味わいでした。

◆アフリカ風サラダ SALADE AFRICAINE

ビーツのピンク色が見た目にも映えるサラダです。ドレッシングはシンプルなお味なのでどんな料理に添えても良さそうでした。

◆ヤッサプレ YASSA POULET (アフリカ風鶏のマスタード風味)

「ヤッサ」とは玉ねぎ、「プレ」とは鶏肉のこと。たっぷりのスライス玉ねぎと丸ごとの鶏肉をレモンとマスタードでマリネしてから野菜と煮込みます。玉ねぎの甘みが美味しい一品でした。

◆遊牧民のミントティ ATAYE

ティーセレモニーの茶器一式はラフマトゥさんをご持参くださいました。民族音楽をかけ、踊りながら大きな美しい1枚の布を体と頭にまとわれると、回りは、すっかりアフリカの雰囲気です。

銀製の急須から、小さな人数分のグラスにミントのお茶を注ぎ入れます。

時間をかけて3杯飲むのが作法で、1杯ごとに意味があるそうです。

1杯目は「人生のながみ」、2杯目は「愛情の甘さ」、3杯目は「友情の甘さ」だそうです。

今回は2杯目まで淹れていただきましたが、たしかに1杯目は茶葉のながみが感じられ、2杯目はまるやかで優しい味になっていました。



講師のラフマトゥさんの気さくで明るい性格のおかげで、自由に質問が飛び交うなど、とてもアットホームな雰囲気のなか料理ワークショップがすすめられました。



参加者の皆さんも民族衣装を着せてもらったり、民族音楽に合わせて踊りながらお茶を楽しんだり、異国情緒を感じていただけたのではないのでしょうか。

青木ラフマトゥさん、参加者の皆様、どうもありがとうございました。
(世界の料理委員会委員 山澤絵海)

【講師からの一言】

アフリカというと一般的にはケニアやタンザニアなどが思い浮かびますが、西アフリカのマリ国では黒人やベルベル系などの多様な文化が混在しており、ステレオタイプなアフリカのイメージとは大きく異なることに気付かれることと思います。

東南アジアにもいろいろな国があり、文化が多様なように、アフリカでも国や地域によっていろいろな文化があります。日本から遠いため、アフリカと一言で片づけ、何となくわかったような気分になってしまいがちですが、今回の話でアフリカの多様性についても理解を深めていただけたら、たいへん嬉しく思います。

多様な文化に彩られた明るい国柄のマリ国ですが、反政府活動を続けていたベルベル系のトゥアレグ人が同国北部を制圧し今年(2012年)4月に独立宣言を出したこと、また、これら混乱を背景に政府内でもクーデターが起り現在は暫定政権による統治となっていることなど、この数カ月間、政治情勢に大きな動きがありました。

20万人近くが近隣国に難民として流出したという報道もあります。早く、平和が戻り、また世界各国から観光客が訪れる日が来るようにと祈っています。
(青木ラフマトゥ記)

「オランダと日本の深い歴史を探る！ オランダ文化 出島から日本へ」

講師 イザベル・田中・ファンダーレンさん

講師プロフィール

1959年 オランダのユトレヒト生まれ。
ライデン国立大学・日本学科修士課程修了
1981～1983年 大阪外国語大学と筑波大学に留学。
1985～2011年 財団法人日蘭学会勤務
（講談社オランダ語辞典、オランダ商館長日記の編集、
オランダ通詞の研究、展覧会企画などに関わる）
現在、長崎大学非常勤講師
オランダ留学中の日本人（今の夫君）と結婚
26年前から千葉県我孫子市の仏教寺院の奥様



江戸時代初期から幕末にいたる、いわゆる鎖国時代は1641年から1853年まで続いたが、この200年余の間、オランダはヨーロッパ諸国では唯一、長崎貿易を通じて日本との貿易関係を維持し続けた国である。

オランダは、自国はもとよりヨーロッパ各国の化学、医学、知識、産物、兵器などを、長崎湾に浮かぶ扇型の人工島「出島」を通じて日本に紹介した。それと引き換えに、オランダは日本の品物や知識を西洋の世界に輸出し、富を築いた。

両国にとって、出島は「新しい世界への窓」以上の大切な意味を持っていたといえる。

江戸幕府は、オランダから毎年もたらされるオランダ風説書の情報によって国際情勢を知り、伝来した学問・技術に関する研究は、その殆どがオランダおよびオランダ語を通じて紹介され、「蘭学」として花開いた。

講演内容

今回は長く、深い両国交流の歴史について、下記の4つに焦点を絞り、たくさんの珍しい映像を交えて話していただいた。

1. 17世紀からのオランダ人の滞在の背景等
2. 出島での日常生活
3. 両国の交流と影響
4. 現在日本に残っているオランダ

1. 17世紀からのオランダ人の滞在の背景等

日本では、オランダというとすぐ「出島」が連想されるようだが、オランダ商館は出島だけに存在したのではなく、1602年に設立された**連合オランダ東インド会社**というアジア全体に広がる広大なネットワークの内に存在する数多い商館の1つであった。本拠をジャワ島のバタビア（現ジャカルタ）に置き、東インド総督が駐在し、議会から特別の保護と権限を与えられていた。この会社が、平戸および長崎・出島にオランダ商館を設置し、その指揮下に置き、到来する船を就航させていた。オランダ東インド会社の主な目的は、インドネシア諸島などから香辛料を手に入れることであった。

1600年4月、最初のオランダの船デ・リーフデ号が豊後国臼杵（大分県臼杵市）に漂着した。24人の乗組員が生き残っていたが、その中に、乗組員のオランダ人ヤン・ヨーステン・ファンローデンスティンやイギリス人航海士ウィリアム・アダムスがいた。引見した家康は彼らを気に入り、江戸に招き、外交政策の相談役とした。ヤン・ヨーステンの屋敷跡は八重洲という地名として残り（東京駅の地下に半胸像）、アダムスは後に旗本として相模国三浦に領地を得て三浦按針という名が与えられた。

1609年 家康はキリスト教の布教に力を入れるスペインなどの旧教国を冷遇し、貿易に力を入れるオランダやイギリスなどの新教国を厚遇する措置をとり、日本との貿易を許可する朱印状を与え、1609年にオランダ、1613年にイギリスが、肥前国平戸（長崎県平戸市）に商館を置いて平戸貿易が始まった。（その倉庫は最近復元されている。）



1639年、江戸幕府はキリスト教禁制を強めるとともに、日本人の海外渡航、帰国を禁じた。イギリスは1624年に商館を閉鎖し日本から退去した。ポルトガル人は1636年長崎に作られた人工の島「出島」に隔離され、1639年には追放、来航を禁止された。

オランダ人はキリスト教に関わらずと申し立てたので、貿易続行は許されたが、平戸の商館は破却を命じられ、翌年1641年、ポルトガル人のいなくなった出島への移転を命じられた。

1641年からオランダ人と中国人だけが日本に残ることが許された。（中国は17世紀末に別の島に住むことを強いられ、今も唐人屋敷跡などが残っている。）

以後、オランダ商館員たちは、わずか15,000平方メートル余（野球場かサッカー場の広さ）で、本土とは1つの石橋のみでつながった出島に押し込められ、厳しい監視を受けることになった。オランダ商館長は情報提供が義務付けられ、翻訳の上、長崎奉行に届けられた。この文書は「オランダ風説書」と呼ばれ、江戸幕府へ送られた。

2. 出島での日常生活

外国人と日本人との接触は、（最初は宗教を恐れ、のちには、密売買を恐れて）厳しく禁じられた。出島から無許可で外出することは許されず、入島できるのは役人・通詞・貿易物を運ぶ人などに限られた。

女性が立ち入ることも禁じられたため、オランダ人の奥さんも連れていけなかった。ただし、長崎の丸山の遊女だけは出島で一夜を過ごすことを許されていた。

本土とつながる1本の石橋以外に、海に面した門が1つあり、オランダ船が到着した時にだけ開かれた。



島内にはいくつもの日本建築の建物、頑丈な倉庫が建てられていた。一番大きな建物は商館長のもの。日本式建物の部屋の中に、外国製の家具や調度品が置かれた和洋折衷の雰囲気であった。

商館員、通詞、医師、料理人などのオランダ人、バタビアから連れて来た現地住民（当時は奴隷の身分）で、音楽を奏でる人、身の回りの世話をする人などが住んでいた。

庭園、娯楽場、ティーハウス、菜園もあった。菜園ではオランダの野菜など（今もオランダセリ、オランダミツバとして残る）が栽培されていた。観賞用の動物、牛豚なども飼われていた。冬が近づくと家畜を殺して保存食を作った。（出島に入ることが許された日本人絵師は、自分が驚いたものを特徴的に誇張して描いている。肉に対する違和感があったと感ぜられる。）

オランダの船は、南アフリカを回って、季節風によってバタビア経由6月頃日本に入港し、10月頃に逆の季節風によって帰る。

その間は忙しい毎日を送った。沖に碇を下ろした貿易船から積荷を、小船で小分けして商館へ運び込み、荷を振り分けて商人に、入札で売り渡す。

そして、船は日本の品物を満載し、東インド会社の豪商のもとに去っていく。このように出島の生活がパターン化されていた。



貿易品

オランダ側からは中国産の生糸、絹織物、インドの更紗、インドやインドネシアの砂糖、香辛料、タイの鮫皮、オランダの薬品、染料、ガラス製品、書籍等が輸入された。

日本側からは、銀、金（小判）、銅に加え、樟脳、陶磁器、着物、屏風、漆工芸品などを輸出した。特に、漆器と有田で焼かれた伊万里焼は珍重された。オランダ・デルフト市の陶器デルフト焼の文様には、伊万里の染付磁器の影響が見られる。

18世紀にヨーロッパに渡った日本の屏風の内、オーストリアのグラーツの城に渡った屏風は、パネルに分割され壁にはめ込まれて装飾の一部として使われていた。それが幸いして、第2次世界大戦時、ロシア軍がこの城から全ての目ぼしい物を持ち出した時にもそのまま壁に残っているのが、先日、発見された。その屏風には、日本に殆ど現存しない豊臣期の大阪城風景などが描かれており、日本の歴史的資料として価値が高いといわれている。

しかし、その後、屏風は壊れやすいし、湿気や虫食いなどのため運ぶのが大変なのでヨーロッパへの輸出が取り止められた。このように、時代とともに、いろんな条件や状況によって運ぶ品物が変わり、交易方法も変化した。

江戸参府 貿易許可・継続のお礼として、商館長一行が江戸に赴き、将軍に謁見して数々の高価な贈物をする
ことが要求された。



毎年行われた江戸参府は、商館長を先頭に、商館医、商館員、通詞、長崎の役人も随行するという大行列であった。大体1月頃出発し、江戸への往復には約3か月を要した。

これは、オランダ人にとっては、日本国内を見る唯一の機会であり、一方、江戸や沿道の日本人にとっても西洋人に触れる稀な機会となっていた。



商館長は滞日中、細かい日記を書かなければならなかったが、道中の詳しい状況が記載された記録が残っている。（珍しい献上品。背の高いオランダ人が身体を伸ばせるよう足を外に出せるようになった日本の駕籠。箱根の山越えの様子。オランダ人は決まった宿に泊まったが、江戸の「長崎屋」という宿を町人などが覗きに來ている絵など。）

オランダ人の出島での生活や江戸参府の様子は、日本人絵師を大いに刺激した。出島の暮らしを描いた長崎絵は、長崎を訪れる旅行者の最適な土産物となった。またオランダ人の姿が陶器の絵柄にもなっている。オランダから運ばれてきた絵画や絵本なども、絵師に創作のアイデアを与えていた。画家の司馬江漢や歌川国芳にはオランダの風景画から部分を借りて、オランダに無いはずの山を入れて日本の風景に仕立てて、描いた絵もある。

出島の商売がない時期には、役人、長崎奉行、九州の大名などが出島に訪ねてきて、オランダの飲物や食物を味わったりした。全国から、医学などの学問を学びたい人が集まってきた。頻繁に來た人には、オランダ人医師が免状を与えたという。その1人、福岡の原三信（はら・さんしん）という医者は1680年代に免状をもらい、その後代々「原三信」と名乗り医者を受け、現在もオランダのライデン大医学部の学生に奨学金を出している。

蘭学 とは、オランダ語を通じて学ぶ学問の総称である。


蘭学は「解体新書（1774年刊行）」から始まったというのが通説で、教科書にもそのように書かれているが、実は、そのもっと前に長崎から始まっている。先駆者としてオランダ通詞本木良意がおり、ドイツの解剖書の蘭訳をおよそ百年前に和訳した。

オランダ通詞とよばれた通訳は、世襲制であり、通商、外交、文化交流の事務役をつとめ、西洋科学を広める上でも重要な役割を果たしていた。貿易交渉が主任務であるが、中には医学、天文学などの学術を修得し、蘭書を読解、翻訳著述するものもあらわれた。全国からオランダの西洋医学や美術などを学びたいと長崎に大勢の人が來るが、コネがないと出島には入れない。それで、通詞のところ泊って、通詞から学ぶようになり、通詞は医師の役をはたしたり、塾を經營して学問を伝えたりしていた。

解体新書（ドイツの解剖学の本のオランダ語翻訳）の和訳に、そもそもオランダ通詞も関わっていたし、江戸の蘭学者大槻玄沢らが使った辞書も通詞の協力によって作成されたものである。

現在、一番よく使われている山川出版の高等学校の教科書に、「西洋の学術、知識は鎖国下にあつて、新井白石らが、ついで、徳川吉宗らが青木昆陽らに蘭学を学ばせたので發達した・・・。1774年、前野良沢や杉田玄白が・・・」云々と記載されているが、通詞が果たした役割等には何も触れられていない。これは、訂正しなければならないと思う。



1727年	医師ケンペルが日本滞在(1690~92)の様子を「日本誌」として残している。	
1774年	杉田玄白、前野良沢らが「解体新書」刊行	
1788年	司馬江漢が長崎遊学し、蘭通詞吉雄耕牛に習う。「西遊旅譚」「西遊日記」	
1798-1806年	元通詞・志筑忠雄の訳による「暦象新書」(ニュートンの万有引力やコペルニクスの地動説の紹介)、ケンペルの「鎖国論」の訳(1801年)。引力、重力、鎖国などの言葉も考え出した。	
1815年	杉田玄白「蘭学事始」刊行。	
1823年	シーボルト来日 1829年 シーボルト事件 シーボルトは長崎近郊の土地を授かり、長崎の鳴滝塾を創設した。江戸の芝蘭堂、そして緒方洪庵が創立した大坂の適塾などが、蘭学塾として名を馳せるようになる。そこでは医学はもとより、天文学や数学、植物学、物理学、化学、地理、用兵術など様々な学問が幅広く学ばれた。	
1853年	ペリー来航	
1856年	日蘭親条約締結、1858年 日蘭修好条約締結	
1859年	出島オランダ商館閉鎖	

3. 両国の交流と影響

出島時代のオランダ語の内、日本風に発音され、今も普通に使われている言葉は**355語**ぐらい数えられる。

例えば、食品：ビール、パン、コーヒー、ハム、アルコール、シロップなど

日常生活用品：ランドセル、ズック、スコップ、インキ、ブリキ、ガラスなど

医学関係：メス、スポイト、レンズなど多い。 船関係：デッキ、ブイ、マドロスなど

通詞がオランダ語の直訳として名前づけたのは、盲腸、十二指腸、鎖国など

有田焼の図柄に、オランダ人が連れてきたラクダや、ローマ字が残っている。

オランダ人が持ってきた材料等が日本で別の用途に使われた例も多い。

例えば、鹿皮や金唐革が煙草入れなどの小物に使われたり、インドの更紗が日本の着物にも使用された。絵画の題材だけでなく、遠近法の技法やエッチングの技術なども伝えた。

逆に 日本からヨーロッパに渡り、影響を与えたものの例としては、日本の着物がある。ある時期、インドでも更紗を使って作られたものがガウンとして使用されたり、オランダの正式なドレスが今でも「やぼん」と言われる。ライデンの学生が授業時に着物（「日本のドレス」）を着るのが流行った時期もある。

輸出用に、薄い螺鈿でつくられた工芸品や、自分の名前をいれたたばこ入れが作られた。また、日本の漆工芸品を模倣して、オランダ風にニスを使って作られたりした。

花見の模様の螺鈿の箱に現れている箸のような、オランダにないものは、オランダの職人には使い方がわからなかったのも、その花見の風景を他の素材で表わした時に間違っ煙管にした例もある。

ゴッホや印象派の画家が日本の浮世絵を集め、これを絵の背景に取り入れるなど、絵画に影響を与えたことは有名である。

4. 現在日本に残っているオランダ

出島のオランダ人の言葉には、上記のような、今も日常生活に溶け込み普通に使われている言葉がある。

出島にあった建物は、現在、もとの場所に復元中である。(博物館、資料館にある19世紀の絵を参考にして) 長崎は、中国よりもオランダとの関係の歴史を大事にし、オランダのイメージを強調しているように思われるが、実際には中国の影響の方が強く残っていると思う。

ハウステンボスは80%位のサイズでオランダの街を作っている。

今、オランダのイメージとして一番親しまれているは、兎のキャラクター「ミッフィ(うさこちゃん)」や、オランダの風車などのように思われる。

以上

(質疑応答の記載は略します。)

講演会は、氷雨の夜にも関わらず、大勢の方がご出席下さり、熱心に講師のお話を聞き、珍しい画面に見入り、時には驚きや笑声が沸き起こるなど、和やかな雰囲気でした。今も、何気ないところで「鎖国時代からのオランダ」が息づいていることを、改めて気付かせていただきました。もし、出島の200年のオランダ人の滞在がなかったら日本の明治以降はどうなっていたらどうかなどと考えながらお話を伺っていました。(会長 高井光子)

事務局便り

【今後の行事予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆ 6月21日(木) 終日 モンゴル人文大学訪日団（9名）の東京案内
- ☆ 6月28日(木) 18:30-20:30 MUA サロン「世界100か国訪問記」話者：森村俊介さん 協会事務局
- ☆ 6月30日(土) 12:00-15:30 「ブラジルの家庭料理」講師：西村アメリカさん 港区立リブラ料理室(田町)
- ☆ 7月21日(土) 13:00-16:30 「UNESCO ユース・フォーラム in 港」宇都宮大留学生など 港区立リブラホール(田町)
- ☆ 8月3日(金) 18:30-20:30 国際理解講演会「外交とユーモア」大塚清一郎大使 港区生涯学習センター 305室



【ご支援およびご寄贈品のお礼】

(A) 都立三田高校から募金額 138,885 円 をお預かりしました。

寄付先につきましては、下記のようにさせていただきました。

- (1) 50,000 円を、東日本大震災子ども支援募金 ユネスコ協会就学支援奨学金として、三田高校の名義で日ユ協連へ送金。
- (2) 70,000 円を、ミンダナオ子ども図書館への支援金としてミンダナオ子ども図書館へ送金。
- (3) 18,885 円を、ミンダナオ子ども図書館への寄贈品の送料分としてプールさせていただく。

(B) 東京インターナショナルスクールより、61,895 円の寄付金をいただきました。

☆ 61,895 円を、ユネスコ寺子屋運動支援として日ユ協連へ送金。

(C) 東日本大震災子ども支援募金 ユネスコ協会支援奨学金

☆ 3月9日 講演会「オランダ文化・出島から日本へ」会場での募金 3,000 円

☆ 3月17日 「マリの家庭料理」会場での募金 2,000 円



(D) ミンダナオ子ども図書館への寄贈品

☆ ミンダナオ子ども図書館への、衣料やシーツ、日用品などの寄贈品を大勢の皆様から頂戴いたしました。4月、まとめて送付いたしました。ご好意に感謝申し上げます。

☆ 皆様からの品物（新品、中古品[洗濯済]、除・毛織物）のご寄贈を事務局までお願い申し上げます。

【事務局長および事務局員の交代について】

- ◎ 前事務局長の吉永高顕さんが5月31日を以って退任されました。1年の短い期間でしたが、港ユネスコ協会30周年の大きな事業のある大事な時期に従事いただきました。ご尽力に対しお礼申し上げます。
- ◎ 事務局員の深川忍さんと武田香代子さんが3月31日を以って退任されました。お世話さまになりました。
- ◎ 4月1日から、葛西章江さんが週4日、1日4時間の勤務時間で事務局員として勤務されています。
- ◎ 6月1日から、長年の会員である富田晴雄さんが、新たに事務局長の任に就かれます。6月から事務局は新任のお二人による体制となります。皆様のご協力、ご支援をお願いいたします。



港ユネスコ協会事務局（火～金 10:30～17:30）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp/>

■ 編 | 集 | 後 | 記 ■ ◆ 広報プレティン・インターネット委員会の委員長を丸2年間勤めましたが、現在の勤務の都合上わがまを申しあげて、3月一杯で降りさせて頂きました。しかし、英文プレティンの作成には必須となる日本語版プレティンの英語訳には引き続き協力させてもらうことにしており、少しでも委員会活動に寄与できるように努力を継続する所存です。（須田康志） ◆ かつて、ひとごとと思っていた「老老介護」が日常生活になってきました。間もなく「認認介護」かもしれません。そんな訳で、大型連休も長期に家を空けることは避けて、「安近短」で過ごしました。せめてものハイライトは、メルル・ストリープが主演して3つ目のオスカーをとった映画「マーガレット・サッチャー」を観たくらい。数年前にやはり実力派で好きな英国の女優ヘレン・ミレンがエリザベス女王を演じてオスカーをとった映画「クイーン」や、昨年の受賞作「英国王のスピーチ」と同様に、みごたえのあるすばらしい内容でした。（棚橋征一） ◆ NHKの「カーネーション」が3月で終わった。舞台の岸和田市は、母の故郷で、徳川55万石和歌山城と豊臣大阪城の中間に位置する城下町。私の故郷和歌山から急行で40分。小さい頃からよく訪れていた第二の故郷のような地。コシノ洋装店の前を通った時、母が「あそこのお父さんも子ども3人を残して戦死したのよ。」と小学生の私に話したことが今も耳に残っている。主人公より2歳年下で、30年前に亡くなった母は、やはり夫を戦争で亡くし、私ども3人の子どもを教鞭を取りながら育てた。（高井光子）